691
2018年
2月発行

よろこびの泉

わたし（イエス・キリスト）が与える
水を飲む者はだれでも、
決して渇くことがありません。
わたしが与える水は、その人の
うちで泉となり、永遠の
いのちへの水がわき出ます。

新約聖書　ヨハネ4：14

椿、大阪市大理学部付属植物園にて

花

河野　進

寒暑や風雪の日も夜も
たゆまず支度をして
ようやく咲き出た花よ
またたくまに散る
もう来年まで会えない
美しく実のなる花ほど
準備の年月は長く開花は短い
主イエスを地上で拝した日もまた

河野　進詩集「万華鏡」より

発行所　〒630-0266　奈良県生駒市門前町七―四〇　日本ミッション
電話〇七四三（七三）一七五四　振替口座〇〇九三〇―二六四二番
発行人　フアベイ・D
編集人　日本ミッション編集部
印刷所　〒350-0303　埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇
電話〇四九（二九六）〇七二七　新生宣教団印刷部
一年分　送料共　九〇〇円
定価　一部　一八円

＊この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。
これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

質問箱

問　少年の頃は万引きや無賃乗車、大人になると他人のお金をごまかし、七〇歳を超えるまでに犯した罪は数え切れません。この頃は死を意識するようになって不安ですが、死んだ者には裁判官も刑罰が科せられず、命が消えたら犯した罪も消えるのではないでしょうか。

答　いいえ、答は「ノー」です。しかし罪が消し去られ、天の国に入る方法があります。

私の弟はタクシーの運転手でした。1日おきの非番の日はギャンブルにのめり込み、負けがかさんで多額の借金を抱え、妻とは離婚。家を失い、子どもらにも迷惑をかけましたし、その後十数回も仕事先を変えて荒れた生活でした。

私は弟に会うたびに、十字架の立つ教会に行き、罪を告白してクリスチャンになるように勧めましたが、弟は私の言葉を無視。「困ってるんや、金を貸してくれ」と無心ばかり。犯罪に走ってはいけないと思いその都度お金を渡していましたが、三年前にガンになり、手術と入退院を繰り返していました。しかし、ガンは全身に転移し、医者からは余命三ヶ月。もう治療法がないので自宅で介護をと言われ、車椅子で退院しました。

その二日後、彼は突然ベッドから起き上がり、「どうしても行かなければならないところがある」と叫んで、家を飛び出して行きました。実はそれまでに、神のみ子イエス・キリストの罪の身代わりの十字架、天国と地獄、「そして、人間には、一度死ぬことと死後に裁きを受けることが定まっている。」（ヘブル9・27）こと。福音を信じるものは、罪と死からの救いを受け、信じないものは神の裁きを受けると、私は弟に何度も語っていました。いよいよ死が迫って初めて、人生でもっとも恐るべき事は、神の御前で罪の言い開きに直面することだと悟り、「どうしても行かなければならない」ところは十字架の下であることを受け入れて、教会へ行き、悔い改めたのです。数時間後、家に帰るとトイレに駆け込み、「ドーン」という音を立てて倒れ、そのまま息を引き取りましたが、彼は赦されて天国へ行きました。罪を消し去ってくださるイエス様を信じたからです。

「はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。」（ヨハネ6・47）

（児玉　博之）

親と子のしあわせ　399

私は、この2月で51歳になります。名古屋駅から西に6㎞くらいの所で生まれ、20歳までそこにいました。

私が幼い時、父は脱サラをして造園業をはじめ、同時に母は市場で花屋を始めました。ですから学校から帰っても家に母はいなくて、代わりに叔母がいました。母は忙しい毎日でした。その母は、66歳の時に脳梗塞で倒れ、体の右半分に麻痺があり介護施設にいます。苦労の多い人生でしたが、今は毎日お祈りを大切にし、穏やかに暮らしています。

私が小さい頃、母は忙しい中でもケーキを焼いたり、給食がない日は弁当を作ってくれ、学校から帰るとよく机の上に手紙が置いてあって、

「おかえり。寒いし、暗くなるのが早いから、遊んでも早くかえっておいで。」

「おかえり、帰ったら宿題をしてね。おなかがすいたらおやつを食べて」と、だいたい広告の裏に書いてありました。お小遣いが置いてある時もありました。私が23歳で東京へ行ったときも、時々お菓子や服などを送ってくれ、やはり必ず広告の裏に「元気ですか？　風邪をひかないようにね。寒いから気をつけて」などと書いた手紙を入れてくれました。また私に子どもが与えられてからは、荷物と一緒に広告の裏に「会いたいね。いつ帰ってくるかな。会えるのを楽しみにしています。風邪をひかせないように」とありました。母の愛を感じます。経済的に本当に厳しい中笑顔で支えてくれました。

その母が倒れたときショックでした。名古屋から私たちのいる佐賀に引き取り、今は週1回会えますが、弱くなる母をみて辛くなるときがあり、充分してあげられない切なさを感じます。しかし母は私たち家族のために祈ってくれています。私も母親になって、子どもを育てる責任と苦労を感じています。

「一切れのかわいたパンがあって、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。」（箴言17・1）子どもにとってお母さんの存在は大切です。母に感謝しつつ、私を母親にしてくださった神さまに「子どもたちを守り支える愛と知恵を、私に与えてください」と祈る毎日です。

（相原　幸紀美）

●質問箱への投書（100文字以内）よろこびの泉に関するお問い合わせは Izumi@japanmission.org まで

聖書こそ、命の書、神のことば

相生市　前田　寿浩

弟が統一教会へ勧誘され、その救出のために行ったキリスト教会。声をかけて下さる方には「弟のために来ているのです」と反発する私だったのですが、愛の神は、一つ一つの疑問に答えを出して下さり、愛があると自負していた私に、ゾッとする自分であることを気付かされたのです。

▲妻の孝子と、教会のロビーにて

ある日、「悪いけど車を運転して、大阪まで行ってくれないかな?」と、教会の先生に頼まれました。八月に熊本県で青年の集会があり、途中まで車で行く予定だというのです。その集会には全く興味がなかった私は、即断ろうと思ったのですが、「熊本かぁ……焼酎と馬刺しがうまかったな。それに先生に恩を売っておくのも悪くない……。」そう思って後日「わかりました」と返事をしました。これが私の大きな転機となったのです。

弟の救出のために

私は一九八五年の六月ごろから教会に通っていました。それは、行方不明になった弟を探すためでした。どうやら弟は、キリスト教と自称してはいますがキリスト教とは関係なく、異端と呼ばれる「世界基督教統一神霊協会」、通称「統一協会」とかかわったことで、居所が分からなくなったようです。当時その方面の知識がなかった私は、マスコミ関係者の知人に頼んで、「統一協会」問題に取り組んでいた、東京都杉並区にある「日本イエス・キリスト教団・荻窪栄光教会」の事を教えてもらい、アポを取って五月下旬、母親と相談に行きました。(浄土真宗のお寺の娘である母にとって、この教会訪問は大変苦痛だったそうです。)そこで「統一協会」の実態と恐ろしさを知った私は改めて上京し、弟を救出するために教会の近くに住み、教会へ通うようになったのです。(弟は、半年後にヒョッコリ富山市の実家に帰ってきました。話を聞くと、統一協会のビデオを見せられている内に精神的に不安定になり、気が付くと、会社の寮を飛び出して放浪していたそうです。)

キリストに出会って

私は、弟の問題で教会に通うようになっただけで、キリスト教について特に求めるものはなく関心もなく、反対に、宗教に頼る人たちに少し反感さえ抱いていました。ですから礼拝の後、私のことを心配して声をかけてくれる方に「私は宗教が嫌いです。たとえ教会に通うことがあっても、それは弟のためで、私にはそれ以上の目的はありません」と言ってしまいました。一事が万事です。教会では挨拶もろくにしない態度の悪い者でした。

夏が来たとき、結局車で行くことはなくなった青年の集会にも、今更断るのが面倒だったのでそのまま行きました。しかし、私はそこでイエス様に出会ったのです。集会では初めに神様の愛が語られました。ちなみに、大会のテーマは「キリストの愛にこたえて」です。私はすぐに反発しました。神様が愛なら、なぜ世界にこのような悲しい事件や事故が起こるのか。なぜ争いや差別があるのか。なぜこの社会で自分が本当にやりたいことが出来ないのか。何故、何故、何故と疑問を投げかける私に、驚いたことに神様は、そのすべてに答えて下さったように思いました。そして質問すればするほど追い詰められていく自分を感じていたのです。そして最後に神様は問われました。「ではあなたはどうなのか?」と。その時私は、プ～ンと自分の心の腐ったにおいをかいだように思いました。その頃私は奈良県にある、「精神薄弱者更生施設(知的障害者更生施設)」で働いており、人よりも愛があると自負していました。

ゾッとする自分が

しかし、本当の自分はそうではありません。高校卒業後、ある農事組合法人で研修していた時、その中の一人の家が火事だと聞きました。私はすぐにトラックに乗って、火事の現場ではなく実家に帰ってしまったのです。火事は幸いボヤで済んだのですが、なぜ手伝いに来なかったのかと責められたとき、「知らなかった」とウソをつきました。自分でもなぜそのような行動を取ったのか分かりません。確かにストレスは大分たまっていましたが、その人とトラブルがあったわけでもなく、むしろ良い人だなと思っていました。後で考えた結果、私は「他人の家なんか燃えてもいい」という、人の不幸を喜ぶような悪魔の心を持っていたのです。自分でもゾッとしました。そのことを思い出した時、私は生まれて初めてイエス様にお祈りしたのです。「イエス様、よろしいのですか。本当によろしいのですか。私のような悪魔の子があなたを信じても。」イエス様は十字架を示して言われました。「わたしたちは、すでに神の子なのである」(Ⅰヨハネ3・1)と。

しかし、私の場合これで終わりませんでした。「私はただの人間だ。聖書に書いてあるような聖い道を歩めるはずがない。」　そんな思いがフツフツわいてきて自分でもどうしようもありませんでした。その時、イエス様が私の心に語られたように思いました。「死になさい。」　もう一度言われました。「死になさい」と。後で御言葉が示されました「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。」(Ⅱテモテ2・11)　奇しくもこの日は八月一五日終戦記念日でした。一九八五年、私はこの日に神様に無条件降伏したのです。

いのちの書の確信

熊本から帰ってからの私は、部屋に閉じこもり、食事も取らず、むさぼるように聖書を読みました。先に創世記は2か月かかって何とか読み終えていましたので出エジプト記からですが、土曜日の夜から読み始め、日曜日は礼拝に出席し、次の土曜日の夕方には読み終わりました。読み終わった時、聖書こそ「命の書・神の言葉だ」と確信し、暗闇ではなくイエス様の愛の光の中に立っている自分を発見したのです。それからも私は順風満帆の人生を送ったかと言えばそうではありません。その年の一二月二二日に洗礼を受けさせてもらいましたが、直前になって、自分には受ける資格がないと思い止めようとしました。一九九二年に関西聖書神学校(牧師を養成する学校)を卒業して教会の御用に就きましたが、八年後、牧師の職から退き、十年間義父の土地を借りてビニールハウスでナスを作って生計を立てていました。与えられた道をまっすぐに歩むことのできない私ですが、神様は聖書の約束の通り私を離れず、ナスを収穫していたときもずっと一緒にいて下さいました。その後、ある集会で「わたしと苦しみを共にしてほしい」(Ⅱテモテ2・3)と聖書からの語りかけを受け、二〇一一年、もう一度牧師の職に復帰。現在は兵庫県相生市にある相生めぐみキリスト教会で奉仕し、4年目になります。

▶教会外観

家庭では、一九九九年八月に生後一ヶ月の男児を養子に迎え、二〇一三年一月、知人の遺児である小学五年の女の子が家族に加わり、二〇一六年四月～一七年一〇月までは小学六年の女の子が里子として加わりました。今後も里子を預かり、ファミリーホームを目指すつもりです。イエス様と一緒に子どもたちの苦しみを共にしたいと思ったからです。

私は弟を救出するために教会へ行ったつもりでした。しかし本当は、群れからはぐれた羊のように彷徨い、疲れ果て、傷ついた私を救い出し、聖い道を歩むようにと、神様はその救いの御手を差し伸べて下さっていたのでした。そして今も弱い私を支え、良いわざをするように導き続けて下さっています。感謝。